

後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上

宮 次 男

一

源義家が奥州清原氏の内訌に介入して、戦乱を鎮め、奥州一帯を平定して源氏の奥州での地盤を固めるものになった合戦は、後三年合戦と呼ばれているが、これは頼義の前九年合戦に対応して用いられた名称である。

この合戦を記録した同時代の史料としては、『後二條師通記』¹、『爲房卿記』²、『中右記』³、『本朝世紀』⁴があげられるが、いずれも、断片的な記述でその全貌は窺い知れない。従って、後三年合戦については、後世の記録によらなければならないわけであるが、池田家旧蔵で、現在東京国立博物館に蔵されている後三年合戦絵三巻はこの意味でも、重要な遺品というべきである。

更に、この絵巻には、貞和三年（一三四七）の年記を有する玄慧の序文があり、各巻末に詞書筆者名と下巻末に飛騨守惟久の画工名を書いているので、美術史的にも重要作品とみなされている。

しかし、この絵巻は完存しているのではなく、前半を失っている。と

後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上

ころが、この絵詞だけを独立させた『奥州後三年記』には発端部分が残っていて、絵巻の欠を補うことができる。しかし、それでもなお一部欠けたところがあって、完全とはいえない。

この欠けたところは幸にも、『康富記』の文安元年（一四四四）閏六月二十三日条によって、かろうじて充すことができる。すなわち、当時仁和寺の宝蔵にあった後三年合戦絵巻をみた中原康富が、その内容を略記しているのである。この康富所見の絵巻は現存絵巻とは別本であって、これについては後述するが、ともかく、これらの資料から、一応後三年合戦の戦況は知ることができる。そこで、順序として、説話的要素も含まれるが、合戦の経過をのべることからはじめよう。

二

戦乱の発端は清原氏の内訌である。すなわち、清原真衡（武則の孫、武貞の男）には嫡子が無かったので、海道小太郎成衡を養子に迎え、さらに源頼義が常陸国多気権守宗基の女に生ませた娘を嫁とした。この祝儀に多くの贈り物が寄せられたが、出羽国の一族吉彦秀武も七十歳の老齢ながら、

砂金を持って真衡館をおとすれた。その時真衡は護持僧と囲碁を楽しんでいたので、秀武は砂金を朱盤に盛って、これを捧げ、庭前に跪いて囲碁の終るを待った。しかし数刻に及んだので秀武はついに怒って、砂金を庭上になげうって、出羽国へ帰ってしまった。真衡は囲碁を終って、秀武の振舞を聞き、これもその無礼を怒って、早速兵を集め、秀武の後を追って出羽へ出発した。

秀武はこの報を聞くと、陸奥国の清衡、家衡の兄弟を味方につけた。清衡は、前九年合戦で頼義に殺された亙理権太夫(藤原)経清の男であり、家衡は経清の妻が後清原武貞に嫁して生んだ男である。従って、清衡と家衡は異父同母の兄弟となり、家衡と真衡は同父異母の兄弟となる。⁵

清衡、家衡は真衡出兵中の留守をねらって兵を挙げた。真衡はこれを知ると、出羽遠征を中止して、途中からひきかえした。すると清衡、家衡は真衡と正面からぶつかるのを避けて、兵を引いたので、結局、真衡は秀武とも清衡、家衡とも交戦できなかった。

永保三年(一〇八三)、源義家が陸奥守として入国すると、真衡は合戦を一時中止して、新任国司の饗応につとめた。それが終ると真衡は秀武を攻めるため、再び出羽へ出兵した。

真衡が出羽へ遠征したことを知った清衡、家衡は、再びその留守をねらって真衡館を攻めた。真衡の妻は、折りしも近くに來ていた義家の郎等兵藤大夫正経、伴次郎兼仗助兼の兩人に援助をもとめて応戦した。(以上『奥州後三年記』)

真衡の養子成衡も留守をまもって、正経、助兼と共に奮戦したが、形勢は頗る不利となった。義家もこれを放ってはおけず、自から精銳を率いて成衡の救援に向った。義家は先ず使者を清衡、家衡に遣わして、兵を引くよう勧告した。兩人はこれを受けようとしたが、親族の中の重光という者が強く反対したので、戦は続けられた。しかし、重光は殺され、清衡、家

衡は敗走する結果になった。この間、出羽に向った真衡は遠征途中で病のため急死するという事件がおこった。真衡に対抗してたつた清衡、家衡にとっては、もはや戦う意味がなくなったのであろう。兩人は義家に降伏を申入れてきた。義家はこれをゆるし、陸奥六郡を二分して清衡と家衡にゆだねる措置をとった。

ここに一応奥羽は安定したが、家衡は次に清衡を陥れようと、義家に讒言をした。義家はこれを取りあげようとせず、逆に清衡に特別の恩賞を与え、家衡を清衡の館に同居させた。そこで家衡は清衡の暗殺を謀ったが、事前に計画が知れて清衡はのがれたので、清衡の館に火を放ち、清衡の妻子眷属を殺害した。清衡は義家にこの歎きを訴えるときにも、自から数千騎を率いて家衡の居城である沼柵に向った。『後二条師通記』の応徳三年(一〇八六)九月二十八日条に、陸奥国に兵乱が起つたことを記しているが、それはこの家衡謀叛のことと考えられる。

戦線は膠着状態が数ヶ月続き、折りからの大雪があつて、清衡を援助する官軍も寒さと飢えのため大いに苦戦した。この間、義家が凍死せんとする部下を抱いてあたためたという逸話が伝えられている(以上『康富記』)。家衡には武衡という伯父がいた。武衡は家衡が義家軍を打破ったということを知り、家衡の陣に祝いにやつて來た。その時家衡は武衡に今後の作戦を相談した。武衡は現在の陣、沼柵より堅固な金沢柵に移すべきことを助言し、自分も家衡に味方して、共に金沢柵に移った。

義家は国府を出発して金沢柵を攻撃し、寛治元年(一〇八七)十一月十四日にこれを陥落させた。武衡、家衡は生捕りの後斬られて、後三年合戦は一応終つた。この金沢柵攻防戦の間には、義家の弟義光の下向、鎌倉権五郎景正の武勇、斜雁の乱れに敵伏兵を知る智略、剛臆の座など、なじみ深い逸話が残されている(これらについては、後にふれるのでここでは略す)。

金沢柵を陥してこの戦乱は平定されたわけであるが、義家としては朝敵

追討の官符をうけて公の戦いにしようと思い出た。『中右記』の寛治元年（一〇八七）十二月二十六日条に、今日陸奥国の国解が進ぜられ、義家が俘囚を追討し終ったと記されているのは、この事をいうのであろう。しかし朝廷ではこれを認めず、義家の私闘として官符を出さなかった。『後二条師通記』⁶がこの合戦を「義家合戦」と評しているのは朝廷の態度を示すものといえる。

敵將の首を持って凱旋途中にあった義家の将兵は、官符が発行されないことを知ると、勲賞の望みなしとして、分捕首を道になげ捨てて帰途についた（以上『後三年合戦繪詞』）。

『中右記』寛治二年一月二十五日条によると、藤原基家が同日新任国司として陸奥守に任じられている。義家はこの度の合戦によって、国司を解任されたのであり、恩賞にあずかる代りにいわば罪人扱いをうけたのである。結局、苦勞してかちとった戦捷も、義家には益するところなかった。しかし、清衡にとっては全くの好運というべきで、奥州一帯を勞少くして手中におさめることができたのである。

二二

以上が後三年合戦の概要であるが、この合戦を絵画化した絵巻はかなり古くからあった。

記録にみるものとしては、後白河法皇が法印静賢に命じて製作させたのが最も古い作例である。

『吉記』承安四年（一一七四）三月十七日条に

武衡家衡等繪子細事、
十七日甲辰 拾遺來臨、爲見申繪、所招引也、件繪義家朝臣爲陸奥守之時、與彼國住人武衡家衡等合戦繪也、件事雖有傳言、委不記、又不畫、靜賢法印先年奉院宣始令畫進也、彼法印借出御倉送之、爲消徒然歟、

後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上

とあるのがそれで、『吉記』では、何時それが製作され、何巻であったか記してない。

前述の『康富記』文安元年（一四四四）閏六月二十三日条の記事によると、

奥州後三年繪事、
参伏見殿、（中略）但自御室仁和寺宮、御寶藏被召寄後三年繪被御覽云々、被取出、可拜見之由、各被仰之間、其詞處々令轉讀了、此繪四卷在之、承安元年月日、依院宣、靜賢法印其時ハ上座にて、承仰、令繪師明實圖也云々、

（後略）

とあり、中原康富が拜見した絵と『吉記』所載の絵とが同本であることは容易に推定されるが、更に、これが承安元年（一一七一）に製作されて、全四巻であり、しかも明實という絵師の名まで記されていることはまことに貴重である。

以上の二史料によって、後三年合戦絵は、後白河法皇の院宣によって、承安元年に静賢法印が絵師明実に描かせた四巻が最初の作品であったことが推定できる。

ここで、後白河法皇がこの絵巻の製作を命じた理由について考えてみたい。

承安元年は、藤原秀衡が鎮守府將軍に任ぜられた翌年にあたるわけであるが、中央の官人でない秀衡が鎮守府將軍に任ぜられた背景には、複雑な事情があったことは想像に難くない。

当時の奥州藤原氏は初代清衡、二代基衡を経て、三代秀衡の時代となっており、その平泉政権の実力は京都の中央政権と十分対抗し得るまでに充実していた。このような情勢下にあつて、京都政権にとっては、い

わば要注意人物であるべき筈の秀衡をなぜ鎮守府將軍に任じたのであるか。その直接の理由は明らかでないが、前九年合戦の後、その戦功によって清原武則が將軍に任ぜられた時とは違って、秀衡は戦功も特になかったであり、それだけに、この任命は異例といつてよい。前記したように、藤原三代にわたつて蓄積されてきた実力に対して、中央政権が一種の敬遠策として、いたずらにこれと対抗する代りに、懐柔によって、この北方勢力をそらそうとしたのではなからうか。そして、中央政権としては、この北方の王者に鎮守府將軍という要職を与えることによつて、律令政府の協力者たらしめようとしたのではないかと考えられる。⁷

しかし、中央にあつて、この措置に反対の態度を示した人もいた。九条兼実もその一人で、日記『玉葉』の嘉応二年(一一七〇)五月二十七日条に

又奥州夷狄秀平任鎮守府將軍、亂世之基也、

と記し、痛烈に批判している。

兼実ほどでないにしても、これを好く思わぬ者もいたであらうし、当局者としても、この人事を積極的に行つたのではなく、止むにやまれぬものがあつたことは、想像されよう。そして、秀衡を一応は鎮守府將軍に任じて、彼れに対する警戒心は怠つていなかったことは十分推測される。

当時の中央政権は、後白河法皇と平清盛の二大勢力によつて代表される。後に法皇は鹿ヶ谷の謀議に係り、また清盛によつて鳥羽殿に幽閉されて、両者の関係は悪化するが、承安元年という時点においては、一

見甚だ友好的であつた。清盛の妻時子の妹滋子は、法皇の寵愛を受けており、この年、清盛の娘徳子は法皇の猶子となり、更に入内している。そして翌承安二年には法皇の御子高倉天皇の中宮になり、後に安德天皇の母となつてゐることを考えると、両者が強く結びついていたことは確かである。しかし、法皇も清盛も、政治家としての利害関係において結びついていたのであつて、いつこの絆がたちきれるか、後の歴史が示すように、それはきわめてもろい、表面上のことであつた。法皇にとつては、中央における実力者であり、またライバルである清盛も、秀衡同様、警戒すべき人物であつたのである。

このような時に、後三年合戦絵巻の製作を命じた後白河法皇の真意はどこにあつたのであろうか。平家全盛の時代に、そのライバル源氏を賞揚するが如き内容の絵巻が院宣によつて作られたのである。専横をきわめる平家への無言のレジスタンスともうけとれよう、或いは、北方の豪族への警戒心のあらわれとも考えられなくはない。いずれにしても、承安元年という時点に、この絵巻が製作されたのは、この事件に対する単純な興味からだけでなく、その後、後白河法皇の政治的配慮が複雑にからみ合つていたことは考えられ得ることである。

この絵巻の製作を担当した法印静賢は、平治合戦に際し、源義朝のために殺害された信西の子で、当時蓮華王院の執行であり、また後白河法皇の側近の一人でもあつた。すなわち、鹿ヶ谷の謀議の時には、法皇から意見を求められ、また、治承三年(一一七九)、清盛によつて法皇が鳥羽殿に幽閉された時には、法皇に随うことがゆるされた程の人物で、『平家物語』には、静賢が随行を清盛に願ひ出たところ「御房は事あやまつ

まじき人なれば」といって許されたと述べてある。清盛も静賢には警戒の念をもたなかったようであるが、ともかく、静賢は後白河法皇にきわめて近侍していた。この静賢に、いわば亡父の敵の先祖を賞賛するような絵巻を製作させたのは皮肉である。

しかし、絵巻の最後の段、すなわち義家の申請が認められず、勸賞の望もなくなったので、分捕った敵首を路次に棄てて帰ったという条は、八幡太郎の異名を持つ義家の態度としては、いささか大人げない話で、義家の無念さもわからぬではないが、逆にこれを嘲笑しているようにもとれなくはない。或いは、こんなところに、静賢の本心が隠されているのかも知れない。

絵師明実については、その名前から恐らく僧籍にあった絵師と考えられるが、それ以外、目下のところ明らかにすることはできない。しかし、蓮華王院宝蔵の主、後白河法皇の鑑賞眼にかなうほどの絵師であるから、当時の第一級の絵師であったと思われる。その作風は、全く想像の域を脱しないが、現存遺品に徴して考えてみると、伴大納言絵詞なし吉備大臣入唐絵詞に近いのではないかと思われる。伴大納言絵詞の筆者は当時第一級の絵師で後白河法皇とも因縁浅からぬ常盤光長に推定されている。年代的にも、この頃の製作であり、ほぼ同時代の吉備大臣入唐絵詞も、これに近似の様式を示しているので、明実筆後三年合戦絵巻のスタイルを敢てこれら現存絵巻の画風に結びつけて、想いをめぐらせたわけである。

なお、ここでのべた静賢本後三年合戦絵巻についての史料は、『吉記』と『康富記』以外には、直接これを明記したものはみあたらない。しか

し、『醍醐寺新要録』が引用している『慶嘉法橋記』⁸にみる「將軍三郎合戦絵」は、静賢本と関係あるように考えられる。

すなわち、建暦二年（一一二二）二月十五日に仁和寺門跡が高野山からの帰途、醍醐寺にたち寄られた際、將軍三郎合戦絵を御覧に入れたことを記しているのであるが、將軍三郎とは清原武衡のことであるから、この時の絵は後三年合戦絵を指すものとみてよいであろう。¹⁰

この絵を御覧になった仁和寺門跡は、後白河法皇の御子道法法親王であり、また当時の醍醐寺座主成賢は、信西の子成範の子で、静賢の甥にあたるわけである。このような人間関係と、後年仁和寺に静賢本が納まっていたことなどを考え合わせると、建暦当時醍醐寺にあった將軍三郎合戦絵は、或いは静賢本そのものであったかも知れないのである。

『康富記』によると、文安当時仁和寺に蔵された後三年絵は四巻であったが、『仁和寺絵目録』には陸奥守合戦絵上下二巻と記載されている。これは、四巻中二巻が散逸したのか、四巻を二巻に改装したのか、或いは全くの別本であるのか、今となっては明らかにすることはできない。

四

静賢本後三年合戦絵巻は現在みることができないが、現存のものとしては、前記した池田家旧蔵で、現在東京国立博物館に蔵されているものが唯一である。¹¹

各巻の外題には「八幡太郎絵詞」¹²と書いてあるが、現在は「後三年合戦絵詞」¹³と称している。上、中、下三巻と序文一卷が存するが、原初は六巻で完結していたと考えられる。

序文は内容の概略をのべた後、八幡殿（源義家）の後三年の合戦の後「星霜は多くあらたまれども彼嘉名は朽ることなし。源流広く施して今に至りて又弥新なり。古来の美歎、誰か其威徳を仰がざらん。世上の知る処、ゆくすゑに伝へ示さん事を思」って此の絵を調えることあり、更に、清和天皇の御代に比叡山の伝法を崇められたが、当代は「天下の静謐、海内の安全、しかしながら源氏の威光山王の擁護なり。是等の由来につきて、此画図東塔南谷の衆議として其功を終ふ。狂言戯論といふことなかれ。児童幼学のこゝろをすゝめて讚仰の窓中、時々是を披」と、源氏の今日なお盛んなのは、山王の加護によるものであることを強調し、幼き者を啓蒙する意図をもつことをのべる。そして最後に「于時貞和三年 法印権大僧都玄慧 一谷の衆命に応じて大綱の小序を記すといふことしかり」と結んでいる。

このように、序文は源義家の武勇を賞讃すると同時に、清和源氏が、現在の足利氏にいたるまで盛んなのは、ひとえに日吉山王の加護があるからであると、比叡山の足利氏に対する優越的な立場を主張しようとする意図が窺われる。

延暦寺と中央政権との関係は極めて複雑である。政権を担当する者は、常に比叡山の僧徒に注意を配る必要があった。山法師たちの意にそわぬことがあれば、山王の神輿がかつぎだされて、彼らの主張は無理にでもききいれられてきた。賽の目、鴨川の水と共に、山法師は政権担当者への思いのままにならぬ存在であったのである。なにゆえ、延暦寺がこのような権力を持つに至ったか、ということについては、ここでのべる余裕はないが、後三年合戦絵巻が製作された南北朝時代にあっても同様

で、特にこの絵巻が製作される二年前の貞和元年（一三四五）には、天龍寺の創建に関連して、足利政権をしぼしぼ悩ませている。

足利尊氏も、延暦寺にはよほど手をやいたらしく、建武四年（一三三七）、越前金崎城がおちて、南朝軍に大打撃を与えた後、比叡全山の寺々を没収して衆徒を山から追放し、その後に軍勢を配置する策をたてた。しかし、これに関して直義をはじめ高師直、上杉重能ら重臣と評定した時、来あわせた玄慧法印に延暦寺の来歴を説かれて、強硬策をすて、これを懐柔する方針に変更したと伝えられている。¹⁴

尊氏をはじめ、足利勢の武将に比叡山の歴史を講義して政策変更においやった玄慧法印が、この絵巻の序文を草した法印権大僧都玄慧と同一人物であることは、まことに興味深い。

玄慧は独清軒と号し、『太平記』によれば、「大智広学の物知り」で、当時「才覚無双」として評判が高かった。洞院公賢は日記『園太暦』で、彼の死をいたんで「今日玄恵法印寂云々、文道之衰微歎」（観応元年——三五〇—三月二日条）と惜んでいる。

玄慧は朝廷にも出講して、花園天皇は彼の儒学を称賛されており、¹⁵後醍醐天皇は無礼講を設けて玄慧に韓退之の詩文集『昌黎文集』の講義を行わせている。¹⁶

また玄慧は、当時としては最新の程朱の学を究め、日本における宋学の基をひらいた一人で、¹⁷学者として当代第一級の人物であった。有名な『庭訓往来』は彼の著書として広く知られるところである。

南北朝分裂後、玄慧は足利政権とも関係が深く、尊氏が建武三年（一三三六）十一月七日、政治の基本方針として「建武式目」を制定した際

には、参与してその名を連らねており、尊氏の男直冬に学問を教え、のち彼を直義にとりなした¹⁸。そして直義が失脚して貞和五年（一三四九）に出家隠遁した時には、高師直の許しを得て、直義を慰めるためしばしば訪問している¹⁹。

このように、時の権力者と親しい関係にあり、しかも「建武式目」の制定に参加した当代第一級の学僧が、後三年合戦絵の序文を書いているということは、この絵巻の製作が、いかに大がかりであったか、容易に察せられよう。

前述したように、序文には、この絵巻は源氏の基礎を築いた義家の威徳を賛え、これを後世に伝えるために、延暦寺僧徒の衆議によって、企画製作されたとのべているが、更に、「しかしながら源氏の威光山王の擁護なり」と、比叡山の存在を強調している。

そして、この序文を足利政権のブレンの一人である玄慧に書かせているところに興味を感じられる。序文の中に日吉山王の擁護をうたっている点も、単なる虚勢だけでなく、源氏の末流足利氏への警告と一種の圧力ともとれなくはない。ともかく南北兩朝の対立した動乱期にあって、比叡山の立場を暗示するような内容の序文をもつ後三年合戦絵が製作される背後には、複雑な政治的意図があったことは推察できよう²⁰。

なお、貞和三年（一三四七）という時点を重視すると、足利尊氏は暦応四年（一三四二）六月四日に累代相伝の劔を日吉社に奉納しており、また貞和二年六月三日には夢想により鎧并劔を日吉社に奉納し、更に貞和三年七月三日には日吉社に庄園を寄進している²¹。これら一連の日吉社に対する尊氏の態度と、絵巻製作の背後事情とに、何らかの関係があるので

はなかるうか。

五

さて、玄慧の序文のある現存本は、上、中、下三巻に調卷してあるわけであるが、各巻末には詞書筆者名が記されている。すなわち、

上巻 詞 仲直朝臣

中巻 詞 左少將保脩

下巻 詞 從三位行忠卿

畫工 飛驒守惟久

いまこの詞書を『奥州後三年記』と比べると、序文をはじめ、殆んど一致している。但し、群書類従本、寛文二年刊本では序文のうち、比叡山の立場を主張する、

就中に清和御代、殊に吾山の佛法を崇御す、其往好を思ふに、流を對ては必ず源を尋ねべきことほりあり、況や又當時天下の靜謐海内の安全、しかしながら源氏の威光、山王の擁護なり

の一節を欠いている。この欠除は『奥州後三年記』が「絵詞」から独立した時にも生じたのであろうか、単なる書き落としてするよりは、意識的にこの条を除いたとも考えられなくはない。

次に、本文では、詞書は、

武衡は國司追歸されにけりときよて陸奥國より勢をふるひて出羽へこえて家衡がもとに來ていふやう

で始まっている。これは前にのべたように、後三年合戦の後半戦が始まって、義家と清衡の連合軍が家衡と戦いを交えたところ、寒気のために義家が苦戦した条の次にくる内容である。従って、現存本では、後三年

合戦の発端から義家の介入、真衡の急死など前半戦と、家衡の謀叛、義家の苦戦など後半戦の初期が欠けていることになる。

一方、『奥州後三年記』は、

永保のころ奥六郡がうちに清原真衡といふものあり

で始まって、この合戦の発端から書き始められており、巻頭は整っていると考えてよい。しかし、前述したように、現存本に欠けている内容がすべて備わっているわけではなく、義家が赴任して合戦が一時中断された後、再び真衡が出羽に向った留守に、清衡、家衡が真衡館を攻めたので、真衡の妻が義家の家人に援助を乞うて応戦したという条まで、すなわち、

正經助兼等これを聞て事とはず、真衡がたちへきたりぬ。清衡家衡よせきたり、すでにたゝかふ。

で中断して、以後は現存本巻頭部分に相当する文章に続くのである。

この逸脱部分の内容を静賢本で補ってみると、

義家の出動、停戦交渉、重光の死、清衡家衡の敗走、真衡の急死、清衡家衡の降伏、清衡家衡の処置、家衡の謀叛、清衡義家の出動、寒中の苦戦

など、かなり豊富な内容があったことが推測される。

現在失われているこれらの場面を絵巻の分量に換算すると何巻何段くらいになるであろうか。現存三巻は各巻五段ずつに分段されているが、それを考慮に入れると、『奥州後三年記』に残る発端部は段数にして五乃至七段で一卷分²²は確実にあり、他は静賢本を参照して、少くとも十段、二巻分はあったと推定することができる。従って、全体としては、六巻で完結していたのではないかと考えられる。

この推定を裏付ける室町期の史料がある。その一は『看聞御記』の永享三年（一四三一）三月二十三日条で、

抑自禁裏繪可尋進之由被仰下。仍勸修寺門跡繪以善首座申出。十二年合戦繪五卷。後三年合戦繪六卷。彌益大領繪勸修寺。已上十四卷借給爲悦也。則禁裏備覧了。

と記しているものである。

その二は、『実隆公記』の永正三年（一五〇六）十一月十二日条にみるもので、

自禁裏武衡家衡対治事後三年合戦繪、可披見之由被仰之、一覽殊勝々々、詞源惠法印草也、

第一尊圓親王、第二公忠公于時大納言

第三六条中納言有光、第四仲直朝臣、

第五保脩朝臣、第六行忠卿

とあって、詞書は源惠（玄慧）が草したこと、及び各巻詞書の筆者を列記している。

これら二史料は、絵の巻数からいっても同一絵巻についての記事と考えられるが、更に現存本と対照すると、『実隆公記』所載の第四以下の筆者が現存本三巻の筆者とそれぞれ対応して一致するのである。

『実隆公記』の記事は現存本が完備していた頃の体裁と詞書筆者を伝える絶好の史料といふべきであろう。なお、玄慧が詞書を草したとあるのは、序文にみる

法印權大僧都玄慧、一谷の象命に應じて大綱の小序を記すといふことしか

を拡大解釈したものであろうが、玄慧の博識を考えると、この解釈には私も賛成である。

以上のことから、この絵巻は原初において六巻あり、それに序文一巻が付いていたと考えられる。しかし、江戸時代にあつては、序文の筆蹟を尊円筆と鑑定して²³おり、それをうけて和田英松氏は『実隆公記』を引用して、

第一は序文にして、第四は上巻、第五は中巻、第六は下巻に当れり。されば、其欠逸せるものは、即ち第二、第三にして、其筆者も明に、第一即ち序文の筆者も尊円親王なりし事、尹祥、経亮の記す所と一致せり。

として、序文を含めて全六巻とする説をたてておられる。

しかし、序文の行文をみると、一行の字数は約二十五字前後であつて、本文の十七字前後の字詰めと大いに異つており、字の大きさも甚だしく違つている。序文は本文と性質を異にするものであるから、行文、字詰の相違が両者間にあつても不思議はないわけであるが、これらが同一卷子に並べ書かれては、絵巻としての体裁上、統一を欠くものである。むしろ別巻になつていた方が自然であらう。また、もし、序文が第一巻の巻頭に調巻されていたとすると、序文だけが残つているのも不思議で、そこに何らかの理由がなければならぬ。現存本の寸法が三巻とも縦四五・七センチであるのに、序文は四六・〇センチで、少し大きい(但し紙質は同質と思われる)。「春日験記」の場合、目録と願文が別に調巻されていることを思い合わせると、この序文も六巻のほかに付け加えられていたと推量する方が穏当であらう。

六

次に、現存の後三年合戦絵巻の内容についてのべよう。

上巻

第一段 家衡の戦勝を知った伯父武衡は、陸奥国から出羽の家衡のもとに来て、祝辞をのべ、更に味方することを申入れて、今いる沼柵より堅固な金沢柵に移ることを進言し、二人は共に金沢柵に移った。

絵は庭先で対面する武衡と家衡、屋内でもてなしの酒肴を運ぶ家人、庭の外には霞を境にして、下は来着した武衡の郎等、上は金沢柵へ出発する将兵を配している。

第二段 義家の弟義光が、兄苦戦ときいて都より援軍に来る話。鎌倉権五郎景正が眼を射られた時、三浦兵太郎為次が足で景正の顔を踏んで矢を抜こうとしたので景正が怒り、膝でおさえて矢を抜いた話。敵城を攻める時、伴次郎像仗助兼という勇士は、義家から拝領した薄金という鎧を着て攻撃したが、城壁ま近かで敵の石弓に兜をうちおとされた話。

絵は義家と義光が対面して会食する所。景正の眼にささった矢を、肩に足をかけて抜こうとする為次を、景正が腰刀で斬りつけている所。城壁に向つて弓を引く景正の眼に矢が当たった所。城壁の下で、兜を石弓でうちおとされた助兼。更に詞にはないが、敵の矢倉に登りついた勇士が頭を射られて倒れる所。矢倉の背後(敵の城中か)で頬に当たった矢を抜く二人の武者とこれを縁からみる鎧直垂の武士、屋内で食事する武者たち。庭で胸に負傷した上半身裸体の武士を二人がかりでおさえている所、うち一人は箸をにぎっており、食事中あわてて出てきたことがわかる。

この絵巻は詞書内容をきわめて忠実に絵画化しているが、この段にみるような、絵の内容が詞書に示されていないということは一考すべき問題

題を含むといえる。詞書の最後は助兼の話で終って、少し余白を残して絵に続き、絵は全て続いていて、途中に断絶個所はないから、これは明らかに製作当初から、このような形であったことは疑いない。従って、最後の主題不明の場面に相当する詞書は始めから書かれていなかったことになるわけだが、この場合、二つのことが考えられる。一つは詞書筆者が、これを書く時、この段の草稿の最後の部分を書き落して、次段に移ったのではないかという見方。一つはこの絵巻に先行する絵巻があった、それを摸してこれが製作され、その際、ちょうどこの部分の詞書が、先行絵巻ではすでに失われていた為に、書き写すことができなかつたのではないかという見方である。私は、序文の内容といい、詞書筆者の顔ぶれといい、単なる摸写本とは考えられないので、詞書筆者の過失と考えたい。(図版V参照)

第三段 武衡が家衡に味方したことを知った義家は、軍備を整え、秋九月に金沢柵へ向って出発した。その時大三大夫光任(前九年合戦に出陣)は、齢八十の老人のため国府にとどまったが、出発当日義家の馬のくつわにとりすがって、この戦に参加できないのをなげく。

絵は女たちに送られる義家の乗馬にとりすがる光任、それをみまもる将兵たち。門前では出発をひかえて兵士たちがあわただしくたちさわいでいる。

第四段 義家の軍が金沢柵に到着した時、空を飛ぶ雁の列が急に乱れたので、敵の伏兵を知った義家は、これを発見し掃滅した話、及び大江匡房について義家が戦術を学んだ因縁をのべている。

絵は野原に行く義家の一行が雁行の乱れで敵の伏兵を知り、これを攻撃する光景である。

第五段 金沢柵を攻めるが、戦いは一向にはかどらない。義家は毎日、剛勇の座と臆病の座をわけて、その日の合戦によって将兵をいづれかにつけ、兵士たちを奮起させた。

絵は剛臆の座にすわって義家に判定される将兵たち、外では戦場から帰りついたばかりの将兵がいる。

中巻

第一段 吉彦秀武の進言によって金沢柵を包囲し、兵糧攻めとなった。

武衡はその徒然を慰めるために亀次という勇士を出して、義家側の勇士と一騎打ちさせようと、この由を義家に申込んだ。義家は鬼武という猛者を選んで闘わせた。両軍のみまもる中を、亀次と鬼武は闘ったが、ついに亀次は兜を鬼武の薙刀にはねられてうち倒れた。

絵は両軍のみまもる中で、鬼武、亀次の兩人がそれぞれ薙刀をかまえて相対峙している所である。

第二段 鬼武が勝ったのをみて、義家の軍兵は歓声をあげたが、武衡側は亀次の首をうばわれまいと城から打って出た。これにこたえて義家側も応戦し、両軍入り乱れての大激戦となったが、義家側の勝利に終わった。

末割四郎惟弘は臆病の座につけられたのを深く恥として、今日こそは剛の座につこうと、飯と酒を多く喰って戦いに臨んだが、頸を射られて食べた飯がそのままとび出した。(図版VI参照)

絵は乱戦の光景がきわめて殺伐に描かれている。亀次の首を打ちとった鬼武をはじめ、斬られた首なし死体、とびちった腕がごろがる中に頸を射られてぶざまな姿で落馬する惟弘、敵首を大刀の先につけてひきあげる騎馬武者がおり、また敵の矢倉には針鼠のように矢がつきささっている。一方柵の内では、建物の縁に立つ武将(武衡か)に戦鬪の模様を報告している将兵がいる。

第三段 家衡のめものとの千任が矢倉に立って義家に向って云うには、汝

の父頼義は貞任宗任を攻めめぐんで故清将軍(清原武則)に臣事してやっと攻め滅ぼしたのに、いまその恩人の子孫を攻撃するとは相伝の家人としてあるまじき振舞である。不忠不義の罪は天罰をこうむるであらうとののしった。義家はこれをきいて大いに怒った。

絵は矢倉の上から義家の幕舎に向ってわめきさげぶ千任を描く。

第四段 金沢細の食糧が欠乏してきたので武衡は義光を通して降伏を申入れてきたが義家はこれをゆるさなかった。そこで武衡は義光を城内に招きたいと云ってきたが、これもゆるされず、部下の季方という剛の者が代りに単身城内に入った。その時季方は狩衣姿で太刀をもつだけであった。城内では敵兵がひしめく中を通して武衡に会い、義家へのとりもちをたのまれた。その時大きな矢を示してこれは誰が用いる矢か尋ねられた。季方は自分の矢であることを云い、大勢の敵兵の中をゆう／＼とひきあげた。

絵は城内で敵兵にかこまれる季方と、屋内で武衡から大きな矢を示されている季方を描く。

第五段 秋から冬になった。大雪でもふれば去年のように、こごえ死ぬのは確実と、将兵は心細がり、妻子に手紙を出したり、自分が死んだらこれを売って京へ帰る路銀にあてるようにと、着物や乗馬を国府の妻子に送った。

城でも食糧がなくなり、城門を開いて女子供が出て来た。秀武は義家にすすめて、それを皆殺しにした。理由はこうすれば城の女子供も出てこなくなり、それだけ早く食糧が尽きるからである。以後は一人も逃げ出す者はいなかった。

絵は妻子へ手紙を書いたり、品物を送り出す将兵。義家と語る秀武。城門の前で殺害される女子供の三場面。

下巻

第一段 藤原資道は義家に身近い郎等で、この時わずかに十三歳で陣中

後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上

にあった。夜半に義家は資道をおこして、城は今夜陥るから味方の仮り屋を焼いて燬をとるようにならせた。人々は不思議に思ったが、云われるままに小屋をこわして焼き、燬をとっていると、曉方に城は陥った。人々は義家の予言を神わざと思った。

絵は夜中小屋を焼くことを資道に命じている義家、小屋をこわし、これを焼いて燬まっている将兵。

第二段 寛治五年十一月十四日、城はついに陥落した。城には火が放たれ、その中で人馬のうごめく有様は地獄のようであった。義家の軍兵はその中を殺しまわった。武衡は池の中にかくれていたが、みつげられて生捕られた。千任もつかまった。家衡は愛馬のうばわれることをおそれ、自らこれを射殺し、卑しい身なりに変装して逃げのびた。城中の美女は生捕られて兵士に与えられ、男はみな首をはねられた。

絵はもえさがる城の内外で首を切られた死体がごろがり、なかには一団をなして切腹した者たち、今まさに首を斬られんとする敵將が描かれている。また、池の中でつかまった武衡、愛馬を射殺する家衡、おさえつけられている千任、太刀や薙刀の先に分捕首をつけた将兵に泣く／＼ひきつけられてゆく女を描き、詞書をそのまま絵画化している。

第三段 義家は武衡を召し出して、罪状を申しさせたのち、首をはねることを大宅光房に命じた。武衡は義光に助命を目願でたのだが、義光の嘆願があったにもかかわらず光房によって斬られた。次に千任が召し出された。先日の悪口をにくんだ義家は、その舌を抜き、木の枝につるして、その足下に武衡の首を置いて千任に主の首をふませた。その間、城はすっかり焼きつくされた。

絵は義家の前にひきすえられた武衡、刑場へつれられて行く武衡、首を斬られる武衡が連続的に描かれ、次に舌を抜かれる千任、やけおちる城の前で木にぶらさげられて武衡の首をふむ千任。

第四段 懸小次郎次任は城中の者の逃げ道を知っていて、逃亡者をごとく捕えた。その中に卑しい身に変装している家衡をみつけ出して首を斬り、義家にさしだした。義家は大いに喜び、紅の衣を与え、また乗馬に鞍をおいてこれにさずけた。更に武衡、家衡の郎等の中で主なもの四十八人の首を斬り義家の前になげならべた。

絵は卑しい身なりの男に変装した家衡を次任が射る所、首に名札をつけて柵にかけならべた前を馬がひかれて行く所、薙刀の先に家衡の首をつきさしたのを持った郎等をひきつれた次任が義家から褒美の着物をもらっている所。

第五段 義家はこの度の合戦の報告書を朝廷にさしだして、この戦いを公認してもらおうとしたが、結局「わたくしの敵」ということで官符の許可は得られなかった。分捕首を京にもち帰っても勳賞にあずからないので途中の道にすててしまった。

絵は朝廷からの返事をみている首脳部と、道ばたに首をすてる兵士たちの凱旋風景。心なしか、義家ら武将の顔もさえないようである。

七

この絵巻が作られた貞和三年(一三四七)には、未だ静賢製作の絵巻が存在していたことは、『康富記』(文安元年—一四四一)が静賢本を引用していることから明らかである。では、両本の間にはどうであったか。

前述したように現存本の前半部が散逸しているので、『奥州後三年記』に残っている部分を含めて、これを『康富記』の記事と比較することにしよう。²⁵

先ず順序として、『康富記』の記事を引用する。

其繪濫觴者、奥州六箇郡勇士眞衡依無子、以成衡爲養子、而爲此養子求婦之處、故伊豫守賴義之娘ヲ迎也、依之當國隣國之親疎出珍膳金帛於眞衡之時、出羽國之秀武云者、及七旬老屈、捧砂金跪庭上之時、眞衡與或僧彈圍棊不顧秀武、及數剋之間、秀武者眞衡之親類也、忽起忿瞋、放火于我館、潜馳下出羽了、然間眞衡進發欲討止秀武之處、秀武相語清衡家衡兄弟眞衡親族之間、清衡家衡押寄眞衡館、進發出羽之留守也、放火、眞衡途中聞之雖引返、既不合敵之間、重欲發向出羽爲討秀武、剋、八幡殿眞衡家、給奥州任、入國也、眞衡爲太守八幡殿致給仕、厚禮義之後、又令進發出羽了、爰清衡家衡又圍眞衡館、留守妻女并成、攻之間、眞衡妻女相語太守之被官人正經助包、兩人奥州郡使檢出使也、巡國之時分也、太守之那使合力成衡有合戰、城中頗危、寄手清衡家衡得利之間、太守義家朝臣自率利兵有發向、被扶成衡、先之遣使於清衡家衡仰云、可退歟、尙可戰歟也、清衡家衡申可退之由、欲避之處、清衡之親族重光申云、雖一天之君不可恐、況於一國之刺史哉、既對楯交刃之間可戰之由申之、與太守官軍及合戰、重光被誅了、清衡家衡兩人跨一馬沒落了、此間眞衡於出羽發向之路中侵病頓死了、此後清衡家衡、對太守不存野心、死亡之重光爲逆臣之由陳之、請降之間、太守免許之、六郡割分、各三郡充被補清衡家衡處、家衡雖諱申兄清衡、太守不許也、剩清衡有抽賞之間、家衡令同居清衡館之時、密謀青侍、欲害清衡、々々先知之、隱居叢中處、家衡放火燒拂清衡宿所、忽殺害清衡妻子眷屬了、清衡參太守、此歎訴申之間、自率數千騎發向家衡城沼柵、送數月、遇大雪、官軍失鬪利、及飢寒、軍兵多寒死飢死、或切食馬肉、或太守懷人令得溫令蘇生、如此之後、重率大軍欲進發之、太守義家之弟義光於京都聞此大亂、雖申暇無勅許之間、辭官職逃下、屬太守攻敵了、此後家衡打越伯父武衡館相談此事、武衡申云、太守者天下之名將也、已得勝軍之名、非高運乎、可楯籠金澤城之由誘也、武衡同所籠入也、太守又攻此城、權五郎景正被射右眼、

三浦按此矢時、踏景正類、景正按御敵書三浦云、未聞以足踏人面、怒之、仍跪拔矢云々、家衡之勇兵、

鬼武

、大守之勇兵、一人充出逢、決雌雄事等此時也、此勝負時、大勢出城中
有大合戦、後焼破金澤城、武衡引出城中、池底被切首、武衡之郎従平千住
又生虜ニシテ、依惡口之咎、先拔舌、鐵鉗結付樹頭、不令踏地、踏付武衡
頸了、其體唐人ノ人ヲ縛シテ中ニ上ルニ同也後□此金澤城ヨリ軍敗サル以前ニ落行小兒尼女、不
謂老少、悉於城麓殺害了、城皇著計賊此事秀武所申大守也、金澤城焼落之後、家
衡擔夫ノ如シテ相交賤者落行之所、於城外見付切殺了、大守征伐功終、雖
被申上勸賞之由、爲私合戦、非公方戦忠之由、有勅答、仍武衡家衡已下賊
首被棄路次云々、予今日始拜見此繪之間、萬之一馳筆了、

卷頭は、玄慧本―現存本―は

永保のころ奥六郡がうちに清原真衡というものあり

で始まり、静賢本は

其繪濫觴者、奥州六箇郡勇士真衡依_レ無_レ子

としているから、両本とも巻初は成衡が真衡の養子になる記事から書き
おこされている。しかし、砂金を捧げて庭で待つ秀武について玄慧本は

秀武老の力疲て苦しくなりて

と年齢を明らかにしていないのに、静賢本は

及三七句老屈

として、具体的な年齢を入れている。『康富記』の詞は大要を書いたのだ
から、両者の年齢表現が逆であれば、別に問題はないが、そうでないの
でこれは留意する必要がある。

更に、秀武が怒って帰国する時、静賢本は

放_レ火ニ于我館、潜馳_二下出羽_一了、

と、館に火を放ったことを記しているが、この事は玄慧本には書かれて
いない。その代り玄慧本は秀武が砂金を庭上になげすて、従者に酒をの

ませ、持参した長櫃を置き去りにして武装した郎従を率いて出羽に帰つ
たと述べている。

次に、真衡が出羽出兵中にその留守館を清衡・家衡が攻撃する条は、
静賢本は

清衡家衡押_二寄真衡館、進發出羽之留守也放_レ火、

とあって、真衡館に火を放ったように書いている。しかし、玄慧本で
は、秀武が清衡家衡にさずけた作戦は、この真衡館の火攻めではある
が、実際には

真衡がたちへをそひゆくみちにて、伊澤の郡白鳥の村の在家四百餘家をか
つゝ焼はらふ

のである。しかし、話の筋としては大差ないように思われるから、或は
『康富記』の場合これを略記したのかも知れない。

後半の武衡家衡征伐戦では、先ず、武衡と家衡が同盟する条を玄慧本
は

武衡は國司追歸されにけりときよて、陸奥國より勢をふるひて出羽へこえ
て家衡がもとに来ていふやう

と武衡が家衡を訪問する形であるが静賢本は

此後、家衡打_二越伯父武衡館相_一談此事

として、家衡が武衡に相談をしに行く形となっている。

また、義光の downward に関しても、玄慧本では武衡家衡が金沢柵に移つて
後に、義光が到着しているのであるが、静賢本は、武衡家衡の連合が行
われない以前に downward している。すなわち、前記の家衡が武衡に相談をも
ちかけた「此事」の中には義光の援軍到着のことも入っているのである。

史実からいうと、義光は寛治元年（一〇八七）九月二十三日に左兵衛尉を解任されているのであるから、²⁶ 下向してまもなく金沢柵は陥ちたことになり（落城は十一月十四日）、これは玄慧本の方が正しいことになる。

しかし、玄慧本でも、義光の到着後に義家は国府を出発して金沢柵に進撃しているのであって、その途中、雁行の乱れに伏兵を知るわけだから、史実をはなれている点では大差ない。²⁷

金沢柵の攻防戦では、静賢本は主要な事件を列記している。すなわち権五郎景正の勇、亀次と鬼武の一騎打とそれに続く合戦、武衡が池の中から生捕られること、千任が舌を抜かれて武衡の首を踏ませられること、秀武の進言により落城前に逃亡した婦女子が殺害されたこと、擔夫に変装して逃げた家衡が殺されたことをあげ、最後に、合戦終了後、朝廷に勸賞を上申しても私合戦の為許可されず、武衡家衡らの賊首を路次にすてたことがのべられている。

これらはいずれも玄慧本でものべられた事件である。但し、権五郎景正の話は玄慧本では義光下向と同じ段で、義家が金沢柵へ向って国府を出発する以前となっている。若し、景正が金沢柵攻防戦で負傷したのなら、玄慧本は誤っていると考えられる。たしかに、玄慧本のこの段—上巻第二段—は義光の下向といい、この場所に置くことはいささか無理で、第四段の金沢柵へ向う途中、斜雁の列の乱れに敵の伏兵を知ったという話の後に置く方が、史実の上からも正しく、更に、第五段の剛臆の座の話の前に入れると、絵巻としての筋の発展の上からもより構成的となる（第五段には義光の郎等季方が登場している）。従って、現第二段は本来、第四段と第五段の間に位置すべき内容で錯簡が生じているのではないか

と考えられる。²⁸

以上、玄慧本の現存絵巻と『康富記』所載の静賢本とを比較したが、『康富記』がどれほど静賢本を正確に伝えているか疑わしい所がある。勿論、個々の事件の内容については、疑問はないと思うが、絵巻でいう配列順序、すなわち段次が、『康富記』の記載順序と全く一致しているかどうか、『康富記』が全内容をすべて記載しているかどうかという問題である。『康富記』をみると、特に金沢柵攻防戦から落城の部分は、事件の羅列で、前後の脈絡がつきかねるし、亀次と鬼武の一騎打などは、その勇士の名を記せず

鬼武
家衡之勇兵、大守之勇兵、一人充出逢、決雌雄事等此時也、

として、その名前を記入していない。これなどは、絵巻をみながらノートをして書き取ったのではなく、絵巻をみた後に記憶した所を書いたと考えられるところである。また、話の内容についても、省略した所がないとはいえない。例えば雁行の乱れで敵の伏兵を知った話や、この知識は大江匡房に師事したおかげであるということは『古今著聞集』²⁹にも載っており、また、義光の郎等季方が敵城によばれて乗り込んだ話は『十訓抄』³⁰にも引用されていて、いずれも玄慧本が製作される以前にあって有名な逸話として知られるところであり、当然静賢本にもこれら載せていたと考えられるが、『康富記』にはみあたらない。恐らくあまりに有名であったため省略されたのであろう。なお中世の説話集にみる後三年合戦関係の説話は、このほか、『古今著聞集』巻六に義光が陸奥に下向する際、笙の祕曲を豊原時秋に足柄山中で授けられた話程度しかみあたらないことをつけ加えておく。³¹

『康富記』の記事から、静賢本と玄慧本とを比較して結論を出すことは早計かも知れないが、両本は、初めと終りの内容は全く一致しており、また全体を通じて、個々の説話も、玄慧本現存部分に関するかぎり、『康富記』所収の話がすべて玄慧本に収載されていることから考えて、両本が全く無関係であったとすることはできない。

ところで、伝承説話というものは、伝えられてゆくに従って、漸次内容が豊富になり、また複雑になってゆく場合が多い。従って、これら後三年合戦の絵巻が、歴史書、或いは物語文学に基くものでないかぎり、その内容は伝承説話として、時代の経過と共に成長、発展して、より内容豊富な形になることは、むしろ当然とすべきであろう。

以上のような観点から、玄慧本は静賢本の単なる摸写本でもなければ、異本でもなく、説話としての発展過程において、静賢本より発展した形態と考えることはきわめて自然であり、院政期のものでなく、南北朝時代における後三年合戦の説話絵巻とみるべきであろう。静賢本が四巻であったのに対し、玄慧本が六巻に増えているのも、このような理由によつたのではなからうか。

註

- 1 ○『後二條師通記』應徳三年九月二十八日條
殿下・藤大納言、召三左衛門督、陸奥兵起事、義綱出羽可レ使敷如何、一定無候、何等不レ侍、
○同應徳三年十月七日條
入レ夜陸奥義家申公卿定申、追可尋、
○同應徳三年十月二十九日條
左大辨匡房候、不定一定之由承レ之、陸奥間事如何、不審也、民部卿與三匡房二覽二義二綱申文、所レ教三陸奥守可レ成日一也、如レ聞書了
後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上

○同應徳三年十一月二日條
殿何事候、時範申三指事不レ候、語召三義綱一之由承了、世間義家合戦依レ事問給也、
爲房召合問給也、

○同寛治二年正月二十五日條
陸奥守可レ成人被レ定、申人々基家朝臣、永清、公卿被レ定事可レ尋也、

2 ○『爲房卿記』寛治元年七月九日條

奥州合戦事 依三奥州合戦停止事、可レ遣三官使一事、可被宣下、大辯者、

○同寛治元年九月二十三日條

予爲レ仰三宜旨參三左府一、(中略)左兵衛尉源義光、停任、不申身暇、下向陸奥、雖遣召、已不參對、仍被解却也、

3 ○『中右記』寛治元年十二月二十六日條

今日進三陸奥國解一也、守義家朝臣追三討俘囚二了、

○同寛治二年正月二十五日條

又未功課藤原基家任三陸奥國守一、若有レ故敷、

4 ○『本朝世紀』寛治元年八月十九日條

大納言實季卿以下參入、被レ定三申陸奥合戦并八幡宮別當等事一、

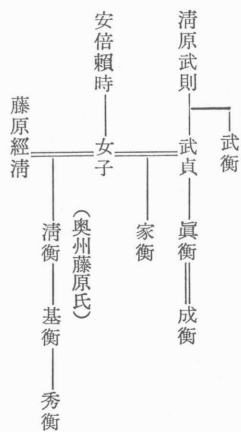
○同寛治元年九月二十三日條

左大臣召三前平一、被レ下三左兵衛尉源義光停任宜旨一、

○同寛治元年十二月二十六日

是日、陸奥守義家朝臣言「上斬三賊徒武衡等首」之由、

5 この関係を系図に示すと左の通り。



6 注1 応徳三年十一月二日条参照。

7 高橋富雄氏『奥州藤原氏四代』(吉川弘文館)参照。

8 『醍醐寺新要録』卷第二十行慶篇 一、御室入寺事

- 9 『吾妻鏡』養和元年九月三日條に「從五位下越後守平朝臣資永、城九郎資國男、母將軍三郎清原武衡女」とある。
- 10 中世にあつては、繪卷の題名は一定せず、時によつてその呼び名が變ることが多かった。前出の『吉記』『康富記』の記事参照。
- 11 但し、これの江戸期の摸本は多数残つてゐる。
- 12 序文の卷末につけられた寛政六年二月十七日付の森尹祥の跋によると、この外題は寛永の頃青蓮院宮尊純法親王の御筆を乞うて付けたとある。
- 13 重要文化財指定の名称。
- 14 『太平記』卷第十八、比叡山開闢事
- 15 『花園天皇宸記』元應元年閏七月二十二日條に、「今夜資朝公時等、於御堂殿上局談論語、僧等濟々交之、朕竊立聞之、玄惠僧都義誠達道敷、自余又皆談議勢悉叶理致」とある。
- 16 『太平記』卷第一、無禮講事付玄惠文談事、
- 17 『尺素往来』に儒学の典籍を列記したのち、「傳、注及疏并正義者、前後漢、晉、唐朝博士所釋古來雖用之、近代獨清軒玄惠法印、宋朝濂洛之義爲正、開講席於朝廷以來、程朱二公之新釋可爲三肝心候也、」と述べている。
- 18 『太平記』卷第二十六、直冬西國下向事
- 19 『太平記』卷第二十七、直義朝臣隱遁事付玄惠法印末期事
- 20 河野秀男氏「後三年合戦繪卷とその思想」(日本歴史二二八、昭和四十二年五月)にこの繪卷が「叡山において制作されたということは、叡山の武家方に対する、また北朝に対する敗北であり、更にこの繪卷は「武士の棟梁であり、源家の嫡流である足利氏の政權を正当化することの意味をもつ」とする見解がのべられている。
- 21 ○『天台座主記』曆応四年六月四日條に
 征夷大將軍權大納言尊氏卿以累代相傳之劍奉納日吉神社、座主記錄相副納之、
 ○『門葉記』貞和二年六月三日條に
 征夷大將軍源朝臣尊氏依夢想、鏝并劍進日吉社、送文副之、
 ○首楞嚴院記家藏本『天台座主記』に
 (貞和)同三年丁亥七月三日將軍尊氏奉寄進日吉社莊園、近江國下管庄、加賀國田上郷、とある。
- 22 岡山美術館に「奥州後三年記」の繪卷四卷があり、卷二以下は「後三年合戦繪詞」と同じ(一部に錯簡あり)であるが、卷一は、『後三年記』にのみ記述がある発端部を詞書として、それに絵を加えたものである。絵はこの摸本が制作された享保四年(一七一九)の創作と考えられるが、各段の絵については、第一段 真衡が成衡を養子にむかえて、酒宴を催すところ、第二段 秀武が小判を三宝に盛り、庭で捧げ持つところ、第三段 清衡、家衡が民家を焼き払うところ、第四段 義家を饗応する真衡、第五段 清衡、家衡が真衡館を攻撃するところとなっている。
- 23 序文卷末にみる寛政六年二月十七日付の森尹祥の跋は
 右後三年軍記序文は太乘院宮贈一品大王尊圓の芳翰にして中山家の珍藏也
 と書き出している。また『橘窓自語』『本朝画事』(倭錦)もこの説をとる。
- 24 和田英松氏「前九年後三年合戦繪卷考」(歴史地理十八ノ六、明治四十四年十二月)。
- 25 両者の比較はすでに三浦周行氏が「後三年役に関する新研究」(史学雑誌二十二ノ一、明治四十四年一月)で行っておられる。
- 26 注2及び4参照。
- 27 詞書では義光が兵衛尉を辞して下向したとする。但し、九月二十三日を義光が陸奥到着後とすると自から問題は別である。
- 28 桜井清香氏『戦記繪卷の研究』に引用された摸本は、第二段が第四段と第五段の間に位置していることである。
- 29 『古今著聞集』卷九武勇
- 30 『十訓抄』卷十
- 31 『日本説話文学索引』参照。